

紙 碑

伊藤郷平博士の逝去を悼む

本学会評議員として多年その発展に尽力された伊藤郷平博士は、昭和59年8月28日クモ膜下出血のため岡崎市立病院で急逝された。享年77才、葬儀は同30日真宗大谷派三河別院で、喪主達雄氏（三重大学教授）、葬儀委員長中根鎮夫（岡崎市長）、同副委員長丸井文男（愛知教育大学長）両氏のもとでとり行われた。

博士は明治39年（1906）10月、長野県下伊那郡伊賀良村大字北方（現飯田市北方）でお生れになった。昭和11年3月東京文理大地理学科を卒業、東京都視学官・長野県高校長等の諸教職を経て同26年、愛知学芸大（現愛知教育大）教授となられた。

博士は、新制大学ではまず研究体制の確立が急務とされ、その組織・運営の推進につとめられて愛知学芸大地理学会を創立し、同大地理学研究所を刊行（現在59号）、県内の地理学の研究と教育の基盤づくりにつとめられた。そして自らは県東部農業の地域構造や佐久間ダムの建設にともなう水没地域の研究にあたられた。さらに豊橋をはじめとする県東部都市の変貌を研究され、29年には「地方都市の研究—新しい豊橋」を学界に問われ、同30年には理学博士の学位を授与された。

これらにおいて博士は、現代を中心とした地理学の研究を主としつつも、さらに視野を拡大してそれらにみられる歴史地理性にも着目し、事実認定の確実性と意義解明の妥当性の導出に努められている。博士の研究の中核は「日本の農業労働需給地域の研究」であるが、そのなかの静岡県中部興津川流域の近世後期～明治前期にわたる研究には、博士の歴史地理学に対する理解と自らの研究成果がよくみられる。また博士の指導・監修になる「蒲郡市誌」・「足助町誌」（ともに昭和49年）、「明治用水百年史」（同54年）もまた博士の歴史地理学観にもとづくものといえよう。博士はつづいて中京広域都市圏の地域構造の研究に出精されたが、それらの諸研究は愛知教育大退官記念の「中京圏」（同47年大明堂）に集大成されている。さらに退官後は矢作川流域開発研究会を主宰され、「流域は一つ、運命共同体」の認識のもとに流域全市町村住民の連帯感を育てる運動を展開され、第三次合国総合開発計画の定住圏構



想の理念確立に大きな影響を与えられた。

博士はまた同46年愛知教育大学長に就任され、同大学創立以来の懸案の名古屋・岡崎両分校の統合と新キャンパスの建設を実現されたが、地理学にとっては国立の教員養成系大学・学部における「地理学の実験科目化」の実現に努力され、その実現を導かれた。これは国立大学における地理学科の財政基盤の確立と研究・教育の活性化に先鞭をつけられたものであり、その有意義さははかり知れないものがある。また博士の研究活動は単に専門分野に止らず、行政・社会等きわめて広範囲にわたっているのも特色であり、地理学の応用性の広汎さをひろく認識させられたこともあげねばならない。その主な兼務役職だけでも、愛知学芸大へ着任間もなくして、県については愛知県地方計画専門委員をはじめ、同会長、同県産業教育審議会議長、国関係では中部圏開発整備地方協議会委員、流域管理計画検討委員会会長、また岡崎市については、同市政顧問、総合計画審議会会長、それに上記した矢作川流域開発研究会会長等があげられる。これらの功により52年11月には勲二等瑞宝章を、また59年8月には従三位を受けられている。ここに博士の学界活動を中心として関連業績の一端にもふれ、会員一同とともに心から御冥福をお祈りする次第である。（浅香幸雄）